

ヨセフのリベンジ¹

ジョナサン・マゴネット
小林 洋一 (訳)

創世記におけるヨセフ物語は、その物語の前に記されている物語群とはいくつかのレベルにおいて異なったものです。まず、ヨセフ物語の前にある、ノア、アブラハム、イサク、ヤコブ物語は、彼らの生涯にとって特別な出来事であるエピソードおよび断片（スナップショット）的傾向をもつものです。それに対して、ヨセフ物語はユダとタマル物語（創38章）による短い中断を除けば、一連の連続した物語となっています。しかも、そのユダとタマル物語でさえも、それを取り囲むヨセフ物語と言語上での結びつきを保っています²。

第二に、ヨセフ以前の族長物語においては、神は直接的に顕現しますが、ヨセフ物語では、神の直接〔的顕現〕³性については沈黙しています。しかしながら、一つの変化が創世記39章以後に現れます。その変化とは、物語記者が、ポティファルの家（2-5節）と、それに続く牢（21-23節）でのヨセフの成功を、「ヤハウエ」（*YHWH*）の現臨と祝福に帰すのですが、牢でヨセフと共にいた給仕長と料理長に対して、彼らの夢の解釈を申し出たとき、物語記者は、彼の夢の解釈は「神」（*Elohim*）に依っていると語っているからです。そして、これ以後、その神の名前〔エロヒーム〕は排他的に使われていきます。そしてヨセフの夢の解釈あるいは彼の生涯に起る出来事の解釈における、神の現臨は、間接的なものであったと見なされています。

1 〔訳者注〕これは2014年5月19日、西南学院大学大学博物館2階講堂で行われた神学部ロングチャペルでの公開講演である。原題は、*Joseph's Revenge*。

2 〔訳者注〕例えば、ユダとタマル物語における、「お調べになってください」（*nakhar*）（創37：32）、「お調べ下さい」「調べて」（*nakhar*）（創38：25-26）と、ヨセフ物語における、「気づいた」（*nakhar*）と「そしらぬ振りをする」（*nakhar*のヒットバエル形）（創42：7）等。

3 〔訳者注〕〔 〕は訳者の補足を示す。

ヨセフ物語は見事に練り上げられた物語です。劇的出来事に溢れ、エジプトにおけるヨセフの経験、そして故郷カナンでの彼の家族の経験のシーンが入れ替わり出てきます。物語記者は、ヨセフがたどった旅そのものだけでなく、甘やかされた寵愛の息子からエジプトでの奴隷、囚人、そして最後には権力者になるという、彼の変化と、その成熟過程もたどれるような作品に仕上げています。そしてこれらの物語の舞台には、ある同一要因が繰り返して出現します。即ち、着物の喪失と取得、穴（牢）に投げ込まれるショックです。まず、彼は兄弟たちにより、「長袖の服」（「多くの色のついた服」）を脱がされます。そして空洞の「穴」（「貯水槽」）（ヘブライ語 'bor'）に投げ込まれます。エジプトで奴隷になり、主人ポティファルから新しい着物一式を与えられます。しかしながら、主人の妻の欲求不満の結果、その着物は脱がされることとなります。しかも彼が彼女に性関係を迫ったとして告発され、そのために牢に投げ込まれます。即ち、「穴」の中にもう一度落ちることとなります。そして最後に、彼がファラオの夢を解き明かすことで、彼は権力の装いとしての新しい服を得ます。そればかりではなく、新しい名前、妻、息子までも手にします。

同じような仕方でも、夢も、彼の人生の舞台を示す役割を果たします。彼は子どものときは、彼自身の特別な運命についての夢を見ます。牢では、囚人仲間の夢の解釈をし、彼らに起る次の運命について正確に予告してみせます。これらの夢は、彼自身についてのものではありません。しかし、そこでは、ファラオの給仕長が彼を覚えていてくれることに期待しながら、彼自身の利益のためにその夢を使おうとします。最後に、彼はファラオの夢の解釈をします。そしてファラオの夢が、予告した危機を救うことのできるの自分であることを示唆することで、権力の座に上ります。美しく才能に恵まれた、しかし、甘やかされた子どもが、魅力的で有能な若者へと成長し、そして結果的に賢人政治家になります。しかしながら、これらのすべての舞台は、彼の兄弟たちの主導的かつ殺人的裏切りの故に起ったことでした。この暴力的行為が、その後の彼の行動にどのような影響を与えたのか。それを追跡することは可能でしょうか…。

実は、物語記者は、それを検討するための非常に多くのインフォメーションを提供してくれています。私は、ここでヨセフが通らなければならなかったそ

の苦しみの故に、他の人々に、それに対するそのリベンジをした、その例として彼の行動の中にみられる二つの要素について指摘したいと思います。

最初に、ヨセフの性格の中にある、潜在的残酷さに注目したいと思います。それは、ファラオの給仕長と料理長の夢に対しての彼の応答にみとれます。彼らは二人ともヨセフと共に牢にいました。そして二人とも一つの夢を見ました。しかし、彼らは、その夢を解釈するすべを知りませんでした。そこで自身夢見る者であったヨセフが今や夢の解釈者となって、その夢解きをします。

給仕長の夢は、彼がファラオの杯を満たし、それをかってそうであったように、ファラオに渡すという夢です。ヨセフはこれを、積極的に解釈し、文字通り言います。「三日たてば、ファラオがあなたの頭を上げて、元の職務に復帰させてくださいます。…」(創40:13)と⁴。料理長の夢は明らかに、より不吉なものでした。しかし、ヨセフが彼の同僚の夢に肯定的な解釈をしたのを見て、料理長は、同じようなものを期待しました。確かに、ヨセフは、まずはそのような解釈を提供しようとしているようにみえます。ここのヘブライ語のテキストは、料理長の期待が高まるような仕方で、その答えを〔給仕長へのそれと〕同じ言葉で始めます。「三日たてば、ファラオがあなたの頭を上げ…」と。しかしながら、ヨセフは、この望みを次の言葉によりを打ち砕きます。「…ファラオがあなたの頭を上げて、切り離し、あなたを木にかけます。…」(創40:19)と。ヘブライ語〔メアレハ〕、「切り離し」がここの違いを鮮明にします。料理長の期待を高めておいて、それらを破壊する。この洗練され皮肉に満ちたもの言いは、ヨセフの内なるダークサイドを示しています。

最初の給仕長とのやり取りにも、ヨセフがそれまでの自らの運命に感じたに相違ない絶望と辛苦のヒントが隠されています。ヨセフは、給仕長に対して、彼が復職したときには自分のことを覚えてくれるようにと頼みます。「ついては、あなたがそのような幸せになられたときには、どうかわたしのことを思い出してください。わたしのためにファラオにわたしの身の上を話し、この家〔ベート〕から出られるように取り計らってください。わたしはヘブライ人の

4 〔訳者注〕聖書の引用は、特に断らないかぎり新共同訳を使用している。

国から無理やり連れて来られたのです。また、ここでも、牢屋 (*pit*) に入れられるようなことは何もしていないのです。」(創40：14-15)。ここでヨセフが、牢屋を「穴」(*pit*) (*'bor*) と言及することの中に、彼の兄弟たちが、彼を捕まえて彼を *'bor*、「穴」(「貯水槽」)(創37：24) に投げ込んだ最初の暴行への反響をみることができます。それは、かの経験がいかに深くヨセフの心の中に沈殿していたかを示しています。しかし、この彼の訴えはすぐには成就しませんでした。給仕長が彼のことを思い出してくれるまでに、ヨセフはさらなる2年を牢で過ごすことになったからです。

後にヨセフは、7年間の豊作と、それに続く7年間の飢饉を予告するという、ファラオの二つの夢解釈の能力をベースに権力を手中にします。ファラオの夢を解釈するようにとの要請を受けた宮廷の魔術師と賢者の反応を描くヘブライ語テキストには、ある種の曖昧さがみられます(創41：8)。そこで用いられているヘブライ語の分詞形の文字通りの意味は、ファラオに、それらを「誰も解き明かさない」となります。これは、しばしば訳されているように、「誰も解釈できる (*able*) 者がいなかった」を意味する可能性があります。しかし、それはまた、「誰も解釈しよう (*willing*) とはしなかった」とも訳せます。つまりとてつもない絶対的権力をもつ王に、悪い知らせ(バッドニュース)を伝える者には常に危険が伴うからです。しかし、ヨセフは、夢の解釈だけでなく、その解決の可能性まで付加し、さらに彼がその仕事を引き受けることができる「聡明で知恵のある」者〔創41：39〕であるかもしれないという、あからさまなヒントまで添えているところを見ると、彼には、そのような不安がまるでなかったようにとれます。

ファラオがヨセフを即座に官職につけたのは、あたかも、おとぎ話に見られる解決法のようにも読めます。しかし、ここでもまた、特に、ファラオとその宮廷の立場を守る必要性においてのある曖昧表現をみるのが可能です。ヨセフは、全国民に彼らの産物の5分の1の徴収を課すことを提案します〔創41：34〕。ヨセフが集める穀物はファラオの財産となり、しまい込まれ、特別な町に保管されます。それは、飢饉の年に民に提供されるべきものなのですが、食物を得るための対価が、どのような結末を迎えるのかは、後になってからのみ

明らかとなります⁵。徴税の責任者として、あるいは、どのようにそして誰にその食物を分配するのかの調停人として働くことは、実際には非常に危険で非難を免れえない役職です。ヨセフには、飢える人々と宮廷の間の「仲介者」(middle man)として、事柄が悪化した場合、人々の怒りのターゲットになるという潜在的可能性があります。ヨセフは、王権側から言えば、王権の立場を守るための、スケープゴートの必要性から生じる、便利で、引っ替え取っ替えの可能な外国人交代要員なのです。この意味において、ヨセフは彼と同じように、昇進しても、命を奪われることもあった後世のヨーロッパ社会における‘Hofjuden’ (宮廷ユダヤ人)の最初の一人なのです。少し脇道にそれますが、ヨセフは、記録の上では、あらゆるリスクを伴う“未来のマーケット”に投資した最初の人ということになります。

ヨセフは、ポティファルの家と牢のすべてを任されたときと同じように、〔宮廷でも〕驚くほどの成功をおさめます。飢饉のときの分配に備えて、豊作の年に穀物は集められ貯蔵されました。彼はその行動において理想的な僕として振る舞いました。主人の利益を促進するために勤勉に働きます。彼はポティファルの家でも優れて良い働きをしたので、ヨセフ自身が述べるように、ポティファルは彼の妻を除いては、文字通り全てをヨセフの有能な手に委ねました。ヨセフは、ファラオの僕としても同様に行動しました。それは、飢饉の年が始まり食物の分配のときが来たときに起った事柄からも明らかです。その〔苛酷で容赦のない〕一連の出来事は、聖書が詳細に記すところです(創47:13-27)。それは、これらの事態の直前〔創47:11-12〕に描かれる、ヨセフが彼の家族のためにアレンジした〔豊かで慈悲深い〕下記のやり方とは際立つ対照をなしています。

47:11 ヨセフはファラオが命じたように、父と兄弟たちの住まいを定め、エジプトの国に所有地を与えた。そこは、ラメセス地方の最も良い土地であった。

47:12 ヨセフはまた、父と兄弟たちと父の家族の者すべてを養い、扶養すべき者の数に従ってパン(‘lechem’)を与えた。(付加 マゴネット)

5 [訳者注] 人々が食料を買うために奴隷になること (創47:20-21)。

しかし、それに次ぐ節には、飢饉があまりにも厳しく、エジプトの地もカナンの地も飢饉のゆえに衰えたので、全地には「パン」（前節にあるのと同じ *lechem*）がなかった、とあります（創47：13）。

第1年目には、エジプトの地、カナンの地の人々は穀物を得るために銀を支払いました。ヨセフはそれをファラオの宮廷におさめました（同14節）。

しかし、銀が尽きたとき、エジプト人はヨセフのところに来ました。「あなたさまは、わたしどもを見殺しになさるおつもりですか。銀はなくなってしまいました」（同15節）。

〔これに対する〕ヨセフの解決は、その年の食物に対する十分な支払いの代価として彼らのすべての家畜を買い上げるというものでした（同17節）。

しかし、その年が過ぎてても、飢饉が続いたとき、エジプト人はヨセフに言いました。今や自分たちが差し出すことができるものは、自分たちの体と農地（land）だけです（同18節）。そこで彼らは、自分たちが滅びないために、また農地が荒廃しないために、種との交換条件で、ファラオの奴隷（*avadim*）になることを申し出ます（同19節）。ヨセフはそれぞれの農地を買い上げます。それにより全土がファラオの所有となりました。その結果をうけて、ヨセフは主要な人口を農地から町々⁶に移します（同21節）。農地を買収し、その所有者たちがそこで生きてはいけなようにすることは、預言者イザヤによって断罪されていることです（イザ5：8）。この時点で、聖書は、その農地売買においては例外があったことを記しています。ヨセフは祭司に属する農地については、これを買うことができませんでした。何故なら、祭司たちはファラオから与えられた特別な地位にあったからです（創47：22）。

さて、今や、エジプト人はファラオの奴隷となりました。彼らは畑に播く種を受けとることはできました。しかし、産物の5分の1はファラオのものでした。残された5分の4は、畑の種のため、彼らの家族と彼らの「子どもたちの食料」となるものでした（同24節）（「子どもたちの食料」とは、文字通りには「あなたの小さい者が食べるために」ですが、ここには、ヨセフが彼自身の家

6 〔訳者注〕新共同訳は、この「町々」（アリーム）を「奴隷たち」（アバディーム）に読み替えている。

族のために与えた食糧の反響がみられます(同12節)⁷。エジプト人に関するかぎり、ヨセフは彼らを救いました。そして、彼らは、ファラオの奴隷としての新しい彼らの立場に満足しているように見えます(同25節)。最後に、聖書は、ヨセフによって設立されたものが、今日に至るまで永久の法になった、と記しています。即ち、エジプト人は彼らの農地の産物の5分の1をファラオに納める。しかし、祭司たちだけは彼らの農地の所有が認められる(同26節)というものです。そして同じ章の次の節(同27節)においては、「イスラエル」として言及される、ヤコブの状況についても触れられています。即ち、その家族は土地を所有し、子を産み、大いに数が増した、と。これはこの人口増加が、後のファラオによって問題視されるほどの勢いとなることへの伏線です。

ところで聖書の、後で起る歴史的観点から言えば、この〔人口増加の〕シーンは、「ヨセフのことを知らない」後代のファラオが、悪しき種類の奴隷制——強制労働と究極的民族浄化政策——のためにイスラエルを選抜する道を準備したことを意味します。しかし、もう一つの側面があります。ファラオに対する奴隷制の上に立てられた社会の概念は、少なくともイスラエルの法に照らすかぎり、それは全く受け入れがたいものでした。十戒に従えば、出エジプト記は、新しい民族(nation)の憲法である、神との契約の基礎となる法、即ち、*'mishpatim'*〔出21章以下〕を挙げています。その最初に、他のイスラエル人を所有することに関して、即ち、奴隷制の概念に厳しい制限を課しています。その法は、借金地獄に落ちてしまった人が、そこから逃れるために、それを支払ってくれるに十分な稼ぎのある他のイスラエル人の奴隷になる、という状況を取り扱っているものです。

出21:02 あなたがヘブライ人である奴隷を買うならば、彼は六年間奴隷として働かねばならないが、七年目には無償で自由の身となることができる。

7 〔訳者注〕創47:24の「子供たち」(タフ)と創47:12「扶養すべき者」(タフ)がヘブライ語において同じ言葉が使われている。

続いて〔奴隷であることの〕詳細な条件が出てきます。そして外国の奴隷には「自由の身となること」が不可能であることが述べられています。しかしここで、重要な点は、〔出エジプト後の〕新しいイスラエル民族は、お互いを永久の奴隷にするというエジプト制度の再生産はできないということです。そればかりではなく、エジプト人が、その農地と、個々の自由を自ら明け渡す態度は、個々人の独立性を重んじる後代のイスラエル人にとっては、個人の尊厳の大いなる損失のように考えられたに違いありません。さらに、イスラエルにおける祭司の地位は、エジプトのそれとは全く逆のものとして成り立っています。それというのも、イスラエルでは、祭司たちが、王の特例法によって土地を所有するというのではなく、彼らの生計は人々の捧げものに依拠していたからです。

ヨセフ物語におけるこの〔奴隷制の〕問題は、聖書におけるより広い〔奴隷と自由の〕テーマに繋がるものですが、ヨセフの行動には、指摘すべきいくつかの問題点があります。確かに、彼はエジプトの人々の命を救いました。しかし、同時に彼は、主人であるファラオの利権を拡大させました。その報酬として、ファラオは、彼に彼の家族が住むための上等の一区画の土地を提供しました。それは、大きな友愛をもってヨセフを遇しているように見えます。しかし、その一方で、ファラオは、ヨセフの家に起るすべてのことをぬかりなく見張っていました（創45：2）。ヤコブが死んだとき、ファラオは葬りのために遺体をカナンに運ぶことをヨセフに許可します。しかし、子どもたちはエジプトに留めおきます〔創50：8〕。これは多分、後の出エジプトのときのファラオが、イスラエル人が、荒野でその神に犠牲を捧げるために、3日の道のりの旅を願いでた際に、「彼らの子どもたちと共に」去ることを拒否する（出10：10）、という、後の日に起ることを暗に示そうとしているようにみえます。軍隊を葬儀の列に伴わせた（創50：8-9）のは、多分に、彼らを守るためだったのでしょうが、ヨセフが戻ることを確保するためでもあったと思われる。

ヨセフの一連の行動は、大きな崩壊に対応する刮目すべき優れた解決法を示しています。彼の業績、それは申し分のないものです。しかし、個人的なレベルにおいて、エジプトの国民を奴隷の立場に落とすことになった最終的な結末

は、どこか、奴隷として売られたヨセフ自身の経験のその全国版の投影のようにみえなくもありません。そのような最終結果は、特定の問題を解決するために計画された戦略のただ中であっては見通しの効かない結果だった、のかもしれない。あるいは、変化する財政状況に対する対応としては、年ごとの臨機応変〔的対応〕の結果だったのかもしれない。しかしながら、今一つの解決は、単純に無料で食料を配布すること、これもありえたはずです——結局のところ、第一義的に、それは、エジプト人が蓄えた食料だったからです。そしてそれがヨセフの元来の意図だった、のかもしれない。しかし、そのような資源の貯蔵は、それ自体の論理的結果として、より多くの資本獲得要請へと導かれていきます。しかし、疑いは残ります。即ち、たとえそれが無意識のレベルに過ぎなかったとしても、ヨセフはエジプトの国民全体を、彼自身の経験した奴隷制の翻案 (version) へと変容させたからです。これはヨセフのリベンジの一つの例証である可能性があります。

もし、これが一つの推測に過ぎないならば、この曖昧さを払拭するものとして、ヨセフの行動について、もう一つの例が示されるべきでしょう。ヨセフ物語はいくつかの仕方です。彼が周到な戦略家だったことを示していることはすでにみました。ヨセフは、給仕長が彼の目的を支援するように訴え、結果的に成功しています。また、豊作の7年間で飢饉の年のために十分な食料を備蓄することを前もって計画することができました。〔そのような彼ですから〕兄弟たちが食料を求めてエジプトに下って来たとき、その彼らを取り扱う手の込んだ計画を立てたとしても驚くことではありません。

創世記42-44章は、ヨセフが兄弟たちをどのように操り、弄んだかが詳細に描かれています。ヤコブは、息子たちを飢饉に際しての食料確保のためにエジプトに送ります。但し、ベニヤミンだけは連れて行かないようにと命じます。それは、ヤコブは未だにヨセフの消息不明の記憶から癒されておらず、愛するラケルとの間の最後の子、ベニヤミンにも事故が起るのではないのかと恐れられたためです。

ヨセフは〔彼らがエジプトに着いたとき〕、彼らには彼が分かりませんでした。しかし、それが彼の兄弟たちであると気づきました。しかし、ヨセフは、兄たち

が彼の前にひれ伏したとき、〔かの日の〕夢が成就しているのを思い起こしたことでしょう。その彼がまずしたことは、彼らが回し者（スパイ）にちがいない、と、攻撃的な態度での詰問でした。彼らは自分たちを弁護して、自分たちは12人兄弟であり、一人は父と共におり、一人は死んだ（文字通りには「いない」(is not)）、と弁明しました。このことは、ヨセフをして、その話を証明するためには、ベニヤミンをエジプトに連れてくることだ、と命じる引き金になったようにみえます。そしてヨセフは直ちに彼らを3日間監禁しました。たとえ短い間であったとしても、それによりヨセフの陥ったかつての境遇の一端を彼らに経験させるためでした。彼らの監禁を解いたのち、彼は自らを神を畏れる者〔創42：18〕（ヘブライ語の意味は「道徳的人間」）であること、それ故に、彼らは〔故郷の〕家に食料をもって戻ることができるかと強調しました。但し、末の弟を見るまでは、兄弟のうちの一人を人質として残さなければならない、と命じます。

兄弟たちは、お互いに語り合いました。この経験は、〔昔〕ヨセフの苦しみに耳を傾けず彼の訴えを無視して、彼を冷淡に取り扱ったことに対するある種の裁きではないのかと。彼らは、ヨセフが彼らの語ることをまさか理解しているとは思ってもよませんでした。ヨセフは感情的に自分を押さえ切れずに、彼らの見えないところに行って泣きました。もし、彼が、単に兄弟たちがどのように変わったかを知るためだけに関心があったのであれば、この時点をもって、下手な芝居（charade）の幕引きをすることができたでしょう。しかし、ヨセフは、彼らを脅し、彼らの見ている前で〔人質となった〕シメオンを縛り上げ〔創42：24〕、その後で、彼は、兄弟たちの袋に穀物を詰めさせ、帰国の道中の食料も与えました。しかし、密かに、彼らが食料購入の支払いのために持参した銀を、彼らの袋に戻しておきました。帰国の途上で彼らはその銀を見つけ、恐怖に包まれました。しかし、彼らは帰国を果し、父ヤコブにことの次第を告げました。しかしながら、ベニヤミンが彼らとエジプトに下ることにヤコブは承知しませんでした。

飢饉が一層激しくなり、生か死かの状況の中で、ユダが主導的に、何としてもベニヤミンを彼らと共に行かせてくれるようにと父の説得に努めます。ユダ

がベニヤミンのいのちの保障人となることを申し出ること、ヤコブは不本意ながらもエジプト行きを承知します。しかし、ヤコブは非常なリアリストでしたので、今回のエジプト行きに際しては次のような提案をしています。袋の中に見つかった銀は返すこと。食料の代価としては2倍の銀をもっていくこと。何やら気難しいエジプト人のためには名産の贈り物ももっていくこと（創43：11）。

さて、ヨセフは、ベニヤミンを伴って来た彼らを見て、彼らを自分の家に呼び入れます。兄弟たちは、それは彼らの袋にあったあの銀の故に裁きが行われるためだろうと恐れます。そこで、事の次第をヨセフの執事に説明します。しかし、執事は彼らを安心させ、〔留め置いた〕シメオンを彼らのところに連れてきました。公式的挨拶が終わり、ヨセフは、同じ母からの弟である、ベニヤミンを目の前にして感情が高ぶり、再び、彼の部屋に退き一人で泣きます。この瞬間も、彼が己の身上を明かすには適したときではありませんでした。しかし、彼にはある考えがありました。そのため食事に際して、彼らを年の順に座らせました。これは兄弟たちを不安にさせました。加えて、ベニヤミンに対しては特別待遇で遇しました。

兄弟たちがヨセフのもとを去るとき、彼は、袋に銀を戻しておくように執事に命じ、さらに、彼が占いをするとき用いる銀の杯を一番年下の弟の袋に入れておくように命じました。兄弟たちは、町を出た後で〔執事に〕呼び止められ、占いの杯を盗んだと咎められます〔創44：4-5〕。絶望の中で、彼らは、自らの無実の証として言います。「それを取ったものは、それが誰であれ、死罪です。そして我々はあなたの主人の奴隷となります」〔同9節〕と。執事は答えました。「それをもっている者は誰であっても奴隷になる。しかしほかの者には罪はない。」（同10節）

これは、ヨセフ自身が経験したことを兄弟たちに経験させようとした第二の例です。即ち、ポティファルの妻との一件で偽証で訴えられて重刑を科せられた例です。

あろうことか、その杯はベニヤミンの袋の中から見つかりました。兄弟たちは恐怖に襲われ、彼らの衣を引裂しました。彼らは、今また、彼の親切を裏切っ

たと糾弾するヨセフのもとに戻らなければなりません。そして再び、今やユダが、明らかに兄弟たちを代表して必死になって、どのようにしたら自分たちに罪がないことが証明できるか、を尋ね、彼ら全てが奴隷になることを提案します。しかし、ヨセフは再び彼の道徳的関心事を盾にして、袋に杯が見つかった者のみが彼の奴隷になる、しかし、他の者は安心して父親のもとに帰ることができる、と主張します。

私たちは、ここで少し立ち止まって、ヨセフの戦略と、その残酷さを検証した方がよいかもしれません。[最初の訪問では、]兄弟たちは故郷の家族のために食料を得るという使命のもとに外国の地に行き、食料分配の支配者、その最大の権力者と対峙します。そしてその支配者は、彼らに恐ろしい結果が想定される、スパイ容疑をかけます。第二の訪問では、彼らはその支配者の〔部下の〕情報員が、自分たちをそれぞれの年齢の順に食卓に着かせることができるほどに彼らのことについて十分な情報をもっていたことを知って不安をつのらせました。逮捕されるかもしれないという恐怖心に加えて、彼らを悩ませたことは、もし彼らが食料を得ることができなかつたら故郷の家族はどうなるのであろうか、ということでした。そしてシメオンが〔留め置かれるために〕連行されたとき、この状況の渦中における彼らの無能さの現実と、兄弟を失う、という恥辱に直面しました。悪いことには、彼らは、老齢の父ヤコブに事の次第を説明し、彼の怒りと嘆きに直面しなければなりません。さらに深刻なことは、それがヤコブにとってどのように大きな打撃となるかを知っていたが故に、何が何でもベニヤミンを連れ帰らなければならないという責任感からくる脅迫観念に支配されていたことでした。ヨセフは、彼らが無慈悲なプレッシャーのもとにおきます。彼は、彼らの袋に銀を返却しておくことで、彼らの恐怖と混乱がいや増すようにしています。最後に、ヨセフの執事が彼らの袋の銀について安心させ、シメオンを解放した後で〔創43：23〕、ヨセフは、それと分かる丁寧な仕方で彼らに食事の饗応をします。しかし、まさにその直後、使者に命じて帰途にあった彼ら呼び止め、銀の杯盗難の容疑者としてベニヤミンを公衆の面前にさらすという新しい告発をします。

ヨセフによって画策されたこれらの一連の動きは、兄弟たちの全ての希望を

断ち切ることを狙っているようにみえます。加えて言えば、ヨセフは、彼らが現在の苦境のすべては、ヨセフに対する彼らの行いに対しての裁きである、と信じるにいたっていることを盗み聞きし、誰が責任を取るべきかで彼らの間で内部抗争が起っていることも見届けています〔創42：21-23〕。多分、最後の意識的打撃として、ヨセフは、意地悪くも、自分は「神を恐れる者」（強い道徳的センスをもつ聖書の慣用句）であると主張することで、2度にわたり自らの道徳心の高さ、さらには、ベニヤミンのことが解決するならば、彼らが家族に食料を持ち帰れるとして、彼らに対する配慮を示しています（創42：18-19, 44：17）。しかし、とどめとして、罪を犯した者、ベニヤミン一人だけが彼の奴隷になることを主張します。彼らに対する彼の最後の言葉は、苦いアイロニーを含んでいます「お前たちは安心して（in peace）父親のもとに帰るがよい」〔創44：17〕。これは実に残酷なことばです。

ヨセフのこの振る舞いの背後にあるのは何でしょうか。一つのレベルにおいて、彼は、かつての過ぎ去った年月、彼らの手によって彼自身が苦しんできた全ての痛みの幾分かをトータルに彼らに経験させようとするものでした。一般的に主張される見解は、「これらは、彼らがああ出来事以来、本当に変わったのかどうかをみようとして試しているものであって、ヨセフの行動は正当化されるべきである」というものです。兄弟たちが過去にヨセフをどう取り扱ったかについて、お互いの罪を認めたのはその変化の一つであり、シメオンを守ろうとする試みと、その後のベニヤミンの保障人と名乗り出ることも、そのような〔変化〕だとするものです。この読み方では、ヨセフがこれらの事柄に満足して、彼らに自身の正体を明かすことになりえたとなります。しかしながら、〔この物語の〕エピソード全体に対する実際の解決は、ヨセフに対する、ユダの個人的訴えの直後に出てきます（創44：18-34）。最後に、私たちは、それに対していくつかの検討を加えたいと思います。

そこでは、ユダは、起ったことを思い起こして言います。

御主君は僕どもに向かって、「父や兄弟がいるのか」とお尋ねになりましたので、「年とった父と、それに父の年寄り子である末の弟がおります。その兄

は亡くなり、同じ母の子で残っているのはその子だけですから、父は彼をかわいがっております」と申し上げました。すると、あなたさまは、「その子をここへ連れて来い。自分の目で確かめることにする」と僕どもにお命じになりました。わたしどもは、御主君に、「あの子は、父親のもとから離れるわけにはまいりません。あの子が父親のもとを離れれば、父は死んでしまいます」と申しましたが、あなたさまは、それを受け入れてくださりませんでした。そして父が、「もう一度行って、我々の食糧を少し買って来い」と申しました折にも、「行くことはできません。もし、末の弟が一緒なら、行って参ります。…」と答えました（創44：18-26）。

そして、ユダは父ヤコブの言葉を引用します。

「お前たちも知っているように、わたしの妻は二人の息子を産んだ。ところが、そのうちの一人はわたしのところから出て行ったきりだ。きっとかみ裂かれてしまったと思うが、それ以来、会っていない。それなのに、お前たちはベニヤミンまでも、わたしから取り上げようとする。もしも、何か不幸なことがこの子の身に起こりでもしたら、私は私の墓に悲しみながら下って行くことになろう」。お前たちはこの白髪を、苦しめて陰府に下らせることになるのだ」と申しました（創44：27-29）。

ユダは、このような父に対して自分がベニヤミンの安全のための保障人となると言います。そして今ユダは〔ヨセフに対して〕ベニヤミンに代わって自分が奴隷となることを申し出ます。

この結びの言葉〔創44：18-34〕は、ヨセフが兄弟たちがいかに変わったかをみるために必要な最後のインフォメーションであるという見解を補強します。そしてそれ故に、ヨセフがとうとう最終的に崩れて自分の身を彼らに明かしたのはこの時点であったとします。確かにこれは一つのファクターかもしれませんが。しかし、私には、それがヨセフの一連の行為の背後に横たわるより深い問いに対する答えとは思えません。明らかに、彼は兄弟たちを試し、彼らにリベンジをしているのです。しかし、それでは誰が一体この下手な芝居（charade）

のターゲットなのでしょう。もしベニヤミンが失われたら一番苦しむことになるのは誰でしょうか。その答えの可能性は非常にしばしば言われているように、父ヤコブその人です。

実は、兄弟たちが父ヤコブに対して、ヨセフは野獣に殺されたとする証拠を作り出し、父を説得していたことなどはヨセフにとっては全く与り知らぬことでした。それ故に、彼の捕囚 (exile) の期間中のヨセフの最深の問いは、なぜ彼を愛する父が、彼をかくも簡単に見捨ててしまったのか、ではなかったのでしょうか。エジプトにおける長い年月を通して、彼を支え続けたのは、明らかなこの父の裏切りに対する怒りだったのではないのでしょうか。それは彼が、自分の長子に、「マナセ」〔忘れさせる〕という名前を付けたことのヒントとなります。それは、「神が、わたしの苦勞と父の家のことをすべて忘れさせてくださった。」(創41:51)を意味するからです。それは、なぜヨセフがかくも執拗に、裁きとして、父からベニヤミンを取り上げるという、主張を繰り返したのかを説明します。そのことこそがヤコブに苦しみを与えると知っていたからです。それはまた、エジプトで得た全権力にもかかわらず、〔帰郷して〕彼の兄弟に会う気はさらさらなかったとしても、なぜ父とさえコンタクトを取ろうとしなかったのかの理由となりえます。

いわゆる、「ユダがベニヤミンの身代わりに進んで自分を差し出すという言明が、ヨセフに深いところで影響を与えた」という説は部分的なことに過ぎません。むしろ、何が起こったのかというヨセフの全理解をひっくり返した決定的に重要な情報は、ヤコブが彼を捨てたわけではなかった。なぜならヤコブは、ヨセフがすでに死んでおり、「彼はきつとかみ裂かれてしまった」にあります。それ故に、彼を捜索しないのは父の過誤だと彼自身に言い聞かせてきた、あらゆる釈明、または〔逆説的に〕彼に事を継続させる力を与え、彼を養ってきたに違いない全ての怒りは、この〔ことを知った〕瞬間に粉々になって崩れ去ったと考えられます。今や、彼は泣きながら自らの正体を兄弟たちに明かさなければなりません。そしてこれまでの全ての年月の間、ヨセフが永遠に失われたと思っていた父を探しに行かなければならないのです。

以上のごとき分析から立ち上がってくるヨセフは複雑かつ矛盾に満ちた人物です。彼は、多岐にわたるプログラムを企画、実行することのできる巧妙な行政官、戦略家です。と同時に、彼のプライベートな生活に影響があるときには、その感情が表面にまであらわに出てきてしまう者として自分を開放してしまう人です。涙について言えば、7回、彼は泣いています。兄弟たちが、どのように彼を冷淡に扱ったかについての告白を盗み聞きしたとき(創42:22)、最初にベニヤミンを見たとき(創43:30)、ユダから彼の父が、彼が死んだと思っていると聞かされ、自分の正体を兄弟たちに明かしたとき(創45:1)、ベニヤミンと兄弟たちを抱擁したとき(創45:14)、後に彼の父のヤコブに会ったとき(創46:29)、ヤコブが死んだとき(創50:1)、そして最後に兄弟たちから、ヤコブがヨセフに彼らを赦すようにとの遺言を残していると聞かされたとき(創50:17)がそうです。それは何年にもわたって押さえつけてきた捕囚(exile)の怒りが噴出したときでもありました。

私たちは、ヨセフの主人たち、即ち、ポティファル、監守長、ファラオ自身に対する忠誠は、彼を捨てたと思っていた父親への代替だったのではないのか、と思いたい気持ちがあります。そして、エジプトにおける驚くべき成功について、あたかも父に見せびらかしをする少年のように、誇らしげに、兄弟を通してヤコブにメッセージを送る中に、彼の失われた子ども時代の一部をみる思いがします(創45:9, 13)。しかし、この背後には、彼の子ども時代の夢の記憶と、神が彼に権力への道を備えてくださったという確信もあります。そしてそれらが、最終的には、彼に兄弟たちを赦し、起ったことは全て神の御旨であると再確認させる力を与えたのです(創45:5-7, 50:19-21)。

子ども聖書(children's Bible)からヨセフ物語の美しいヴァージョンに慣れ親しんできた人々には、今回のこの解釈はショックかもしれません。しかし、聖書は、ヨセフを、現実世界の恐れ、痛み、苦しみのただ中においています。ヨセフは、頼りにすることができた人たちから暴力を振るわれ、捨てられた犠牲者です。しかし、困難な状況のただ中で自らのベストを尽くして生き残り、権力の座に上り詰めた成功者です。彼の怒りと辛辣さは、彼の兄弟たちが、思いがけない事態の中で彼の手の中に落ちたとき、吐露されなければならないも

のでした。彼が兄弟たち、そして間接的には彼の父ヤコブに、それを経験する
ようにと仕向けた、痛みと苦しみは、彼自身の感情を反映するものでした。詩
編作者は、この初期イスラエルの歴史の中の「ヨセフ物語」における、ヨセフ
の性格と行動を形作ることになったあの苦しみについて、彼の理解するところ
に従って憚ることなく次のように詠っています。

詩105：17 あらかじめひとりの人を遣わしておかれた。 奴隷として売られた
ヨセフ。

詩105：18 主は、人々が彼を卑しめて足枷をはめ 首に鉄の枷をはめることを
許された。 (下線訳者)

最終的に、真実が詳らかにされたとき、ヨセフには、彼を支えた信仰と共に、
彼の他の側面も立ち現れます。ヨセフもまた、聖書の多くの主だった人々のよ
うに強さと弱さをもった人にほかなりません。ヘブライ語聖書が顕わすヨセフ
は、十全に複雑な人間そのものなのです。